



# 「多文化な家庭を支える保育とは」 ～支援の現場からみえること～



公益財団法人とよなか国際交流協会 山根 絵美 さん

講座6では公益財団法人とよなか国際交流協会の山根絵美さんに「多文化な家庭を支える保育とは」～支援の現場からみえること～と題してご講演をいただきました。

日本では、言語、文化、宗教など多様な背景を持つ外国にルーツがある子どもたちが増えてきています。多文化な家庭では、日本社会における“あたりまえ”と自国の“あたりまえ”とのちがいのなかで、子どもの母語保持やアイデンティティ、周囲とのコミュニケーションなど様々な悩みや課題を抱えながら子育てに奮闘しています。日本における外国人を取り巻く状況やとよなか国際交流協会の支援の事例から、外国にルーツがある子どもや保護者への支援において大切な視点、多文化共生保育のあり方についてお話しいただきました。

## 多文化共生を進めるために大切なこと

**あってはいけないちがいをなくす** …日本語がわからないというだけで情報が届かない、外国人というだけで給料が日本人とちがう、学校に行けない、病院で診てもらえないなど、あってはいけないちがいをなくしていかなければなりません。

**なくてはならないちがいを守る** …日本に暮らすことで、言葉、文化、宗教のちがいによって、「ここは日本なんだから〇〇語を話すな」「〇〇料理を作って子どもに食べさせるな」「日本人のようにふるまえ」と言われることが多い。日本にきて、日本で暮らすためには日本の法律やルールを守ることは大切です。しかし、「日本人のようになれ」というのはちがいます。母語や母文化といった、なくてはならないちがいを守ることも非常に重要です。

**ちがいを大切にできる社会をつくる** …日本人も外国人も、いっしょにちがいを大切にするために行動していくこと。そのためには、自分たちのあたりまえが本当にあたりまえなのか、立ち止まって考えてみるのが大切です。社会は、文化も言葉も、外から様々な刺激を受けて変化し続けているものです。自分のもっている価値観をいったんすてて、誰もが生きやすい社会のありかたを考えていくことが大切です。「仲良くする」とか「思いやる」だけでは、多文化共生は進みません。

## 保育者に求められること

- 子どものルーツをしっかり把握することから  
⇒ 触れてほしくないことは、実は一番触れてほしいこと。
- 相手の多様な背景を尊重する 否定しない  
⇒ そうして、保護者や子どもたちからの信頼がえられる。
- 「あたりまえ」を問い直す力をつける  
⇒ 戸惑いを大切に、立ち止まって考える。

## もう一步進めるために

- 困った子ども、困った人は、“困っている”子ども、人  
⇒ 困りごとの多くは、その人個人の問題ではなく、社会の問題です。
- 言わないから困っていないとは限りません。  
⇒ 聞いたことがないから問題がないとは限りません。
- 「やるかやらないか」から「何から、どこから始めるか」
- 人が集まると、楽しいことだけでなく、戸惑いやすれ違いも生まれる。同じ社会の一員として「ちがいを豊かさに」

## 【参加者の声から】

- 両親がベトナム国籍の園児がいます。毎日連絡帳に漢字も沢山使って丁寧に子どもの様子を書いてくれます。お母さんに手紙の説明など話そうとすると「先生、大丈夫よ。読めるから大丈夫」といつも言ってくれます。今回の研修を受けさせて頂きお母さんの「先生、大丈夫」という言葉に甘えすぎていたのではないかと感じました。手紙をもらっても、どの手紙が重要なのかお母さんがアプリを使って読んでくれている大変さをわかっていたのかと反省すべき点が沢山ありました。
- 私は日本に住んでいる日本人であるという側において、はじめは相手のことを受け入れようとしていた自分が、だんだん自分側に近づけようとしていたのではないかとことに気づきました。また、この先どのようなことを大切に保育していくとよいか悩んでいました。おたよりは一言これだけはみてほしいということ添えるだけで違ってくる、やさしい日本語、自分の気持ちを表現できるように母語を大切にしてほしいことなど、具体的に何を考え保育していったらよいかということについてヒントになりました。